

「ゆきおをいじめるやつなんかきらいだ!」

「そのこはいじめてもいいのよ。だって、こじきだもの」

「ゆきおはこじきじゃない!!」

燐は肩をいきり立たせた。

「ゆきおは、おれの、おとうとだ!!」

おとうと―雪男は驚いて瞬きをした。そしてはっとして燐を見上げた。燐は厳めしい顔つきをしていた。その顔には見覚えがあった。

「そんな出来の悪い人間など、あなたの弟じゃない!!」

お姫さま―人形が地団駄をふんだ。がしやんがしやんと手足が鳴った。

「殺してやる!!」

人形が吠え、兵隊たちと共に一斉に襲いかかってきた。燐が叫んだ。

「うっせー! さっさとうちにかえせこのやろー!!」

*

「失礼します」

言いながら、雪男は重たいドアを開いた。

正十字学園の理事長室券正十字騎士団日本支部の支部長室は、あいかわらずごちゃごちゃしていた。入る度に目が痛い部屋だ。雪男はそう思いながらも、自らに与えられた

仕事を果たすべく上司に声をかけた。

「任務の報告書です」

「ごくろうさまです、奥村先生。そこに適当に置いておいて下さい」

部屋の主であるメフィスト・フェレスはいつもの人形趣味に興じているようだった。適当に声を投げかけるだけで弓夫に見向きもしない。部屋の中央には大きなドールハウス―ここまで規模がでかいといっそ箱庭と称した方がいいかもしれない―が飾っており、フェレス卿はそれを熱心に掃除していた。

雪男は呆れつつ報告書の束を執務机に置く。さっさとこの場を後にしようと回れ右をして、ふと足を止めた。

「それ……」

雪男はドールハウスに近づいた。

よく見ればドールハウスは古めかしいアンティークのものだった。フェレス卿の最近の趣味とは趣がちよっと違う気がする。

ドールハウスの部屋の中をよく覗くと、一部がぼやでもあったみたいに焦げているのがわかった。

「ああ、倉庫を掃除していたら出てきたんですよ」

フェレス卿は上機嫌だった。趣味の時間が楽しくて仕方がないといった様子で、雪男の疑念など気にならないようだ。